

2020 年度高齢社会助成の選考について(大橋選考委員長講評)

高齢社会助成選考委員長 大橋謙策

超高齢・人口減少、そして地域社会や、家族形態の変容という複雑で困難な社会状況の中で迎える「人生 100 年時代」を活力あふれる社会にするためには、自助・互助・共助・公助が一体となって人々を支え合う社会の構築が喫緊の課題です。この課題の解決社会助成につきましては、「共に生きる地域コミュニティづくり」をテーマに、「地域福祉に資するための活動、研究に対して助成を行っています。

1. 「地域福祉チャレンジ活動助成」

「地域福祉チャレンジ活動助成」については、「人生 100 年時代の社会システム、持続可能な地域づくり」に向けた地域包括ケアシステムの展開、そして深化につながる次の 5 つのテーマに該当する活動を対象としており、52 団体より応募がありました。

テーマ	件数
1. 専門職と地域住民の協働によるインフォーマルなサービスづくり	12 件
2. 認知症の人、家族、住民がともに行う安心、安全な地域づくり	3
3. 人生の看取りまで含む生活支援につながる実践	7
4. 複合的な生活課題に対する（家族）支援につながる実践	11
5. 全世代交流型の活動、就労の機会提供、社会参加づくり	19
合計	52 件

応募団体は、NPO 法人が 21 団体と、昨年同様、申請全体の約 4 割を占めています。一方、ここ数年、申請が低調であった社会福祉協議会（5 団体）や社会福祉法人（6 団体）からの申請が増えました。取組み内容については、共生社会構築に向けた農福連携や多世代のつながりの創出等に加え、今年の特徴として、災害への対応や新型コロナウイルスに関わる接触制限下における新たな活動を志向したものが見られました。一方で、当助成の趣旨である「人生 100 年時代の社会システム・持続可能な地域づくり」に合わない申請が見受けられたことは、残念です。

全申請について、実行性や発展・波及性等、様々な角度から選考いたしました結果、今年度 3 団体を採択しました。昨年度採択した 2 団体の継続助成とあわせ、助成金額は 5 団体で 981 万円となります。

各新規採択候補の活動概要は「2020 年度地域福祉チャレンジ活動新規助成活動概要」をご確認いただきたいですが、新たな見守り・災害時避難等の仕組みづくりに向け、地域住民や各種団体とのつながり構築に取り組む地区社協をはじめ、各々の活動はチャレンジングなものとなっています。なお、**地区社協、学校法人からの採択は初めてとなります。**

2. 「実践的課題研究」「若手実践的課題研究助成」

研究では、実践的課題研究（2年研究）で32件、若手実践的課題研究（1年研究）で10件の応募がありました。

テーマ	実践的課題	若手実践的課題
第1分野：高齢者が安心した生活が送れるまちづくり	24件	7件
第2分野：人生100年時代の「高齢者の生きがい・自己実現・就業支援」	5	2
第3分野：認知症の人が地域で安心した生活ができるまちづくり	3	1
合計	32件	10件

分野別の応募状況では、実践（2年）・若手（1年）ともに第1分野が7割以上である一方、認知症関係に関する第3分野は合計4件へと、昨年につき、減少となりました。

全申請について、研究の意義、研究デザインの妥当性、計画性、社会への貢献性、波及性等、様々な角度から選考いたしました結果、実践的課題研究（2年）については、1件を採択し、昨年度採択の1件の継続助成とあわせ、助成金額は2件399万となります。また若手実践的研究課題（1年）については、5件428万を採択しました。

各採択候補の研究概要は、「2020年度実践的研究新規助成研究概要」をご確認いただきたいですが、採択候補6件のうち、2件は、**当財団の恒久課題である認知症の人とその家族の支援**に関する研究です。

申請の中には、研究組織に研究者と実践家が共に参画するという「実践的」の要件を満たしていない申請や研究課題、研究の枠組み、研究方法等が不明確な申請が見受けられました。

2021年度は、研究課題、研究の枠組み(仮説)等の研究計画が明確であり、それに基づいた調査や検証等を研究者と実践家が協働して現場の実践をベースとして進めていく内容の申請を期待しています。

また特に、認知症関係や若手研究者からの積極的な応募も期待しています。

3. 助成開始後のフォロー

助成開始後、新型コロナウイルス感染状況次第では、活動・研究スケジュール等に影響が生じることが予測されますので、柔軟に対応していきたいです。そして、助成終了後にはシンポジウム、ワークショップ等の場で活動・研究成果の発表を行います。